

<ハモ通15th 特別企画 社員による過去セレ>

通常のコラムに加えて、過去の記事の中で、弊社社員のお気に入りや再掲する、という企画です。

ハモコミ通信 2019年5月号

5月号は有澤健児の担当とさせていただきます。

◎ 相田みつをさん「しあわせはいつも自分のところがきめる」(ハモコミ通信 2012年3月号より便宜上、一部編集して掲載)

以下は、銀座の相田みつを美術館館長でいらっしゃる一人さん(相田みつを氏ご長男)のインタビュー記事より抜粋したものです。

(前略)

若い頃から晩年まで、父が好きでよく書いていた言葉に、「一番大事なものに、一番大事な命をかける」があります。

この言葉の対極にある作品として、「アレもコレもほしがるなよ」という言葉もあります。

父の言葉というのは、どちらにしろ自分に向けて言っている言葉ですから、父自身、アレもコレも欲しかったのだと思います。

社会的名声も、お金も、豊かな生活も欲しい。

しかし結局一番大事なものは何かと考え、捨てていったなかで、最後に残ったものが書だたのではないか。

(中略)

「しあわせはいつも自分のところがきめる」というのが、父の幸福感を端的に表した言葉です。

もう少し詳しく言いますと、禅の影響があつたことと思いますが、“比べない生活”というのを理想としていたようです。

(後略)

相田みつを氏の「そのうち」という詩も紹介されました。

「そのうち」

そのうち お金がたまったら

そのうち 家でも建てたら

そのうち 子供が手を放れたら

そのうち 仕事が落ちついたら

そのうち 時間のゆとりができれば

そのうち.....

そのうち.....

そのうち.....と、

できない理由を

くりかえしているうちに

結局は何もやらなかった

空しい人生の幕がおりて

頭の上に 淋しい墓標が立つ

そのうちそのうち

日が暮れる

いまきたこの道

かえれない

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

ハモコミ通信 15年の中で良いお話が沢山ありましてその中からひとつを選ぶのが大変でしたがこれを選びました。

相田みつをさんの「一番大事なものに、一番大事な命をかける」という言葉。

そしてこの言葉の対極にある作品として「アレもコレもほしがるなよ」という言葉。

私もそうですが人間ならアレもコレも欲しがってしまうと思います。

社会的名声、お金、豊かな生活.....

欲しいものを手に入れるために貪欲になり、手に入れてもまた欲を満たすものを欲しがってしまいます。

そんな時、一番大事なものを失っていないだろうか？

大事なものを失いかけていないだろうか？

誰かと比べて自分は不幸だと言っている人がいますが、それは大きな間違いだと思います。

「しあわせはいつも自分のところがきめる」という言葉には深い意味があり、共感しました。

「一番大事なものに、一番大事な命をかける」という気持ちをもっていれば「人と比べること」は馬鹿馬鹿しく思えてきますし、人に何か言われて気持ちがブレることもなくなるのではと感じました。

相田みつをさんは“比べない生活”を理想としていたとありますが、まさにそのとおりだと感じました。

ハモコミ通信 2019年 6月号

6月号は大下諭司の担当とさせていただきます。

◎ 三勝一敗 (ハモコミ通信 2015年 2月号より)

年が明けて、〈今年は〇〇を続けよう〉と決心した人は多いでしょう。

たとえば「明日から英会話を1日30分学習しよう」と決意したとします。

初めの数日は、計画通りに勉強が進みました。ところが、10日ほど経った時に予定外の仕事が入ってしまい、残業もあったので、英会話の学習を忘れてしまいます。

一度習慣が途切れてしまうと、「やっぱり私はダメだ、何をやっても続かない」と自信をなくし、その勉強すら止めてしまいがちです。

決心しても継続できないことを、よく「三日坊主」といいます。

しかし、仮に3日実践して1日挫折する、また3日継続して失敗する、さらに3日続ける・・・と、三日坊主を1年間繰り返すと、実に270日ほど実践できることになるのです。

〈自分は意志が弱い〉と嘆くより、〈三勝一敗でもよい〉とポジティブに受け止めることで、1年では3日と270日の差になるのです。

やがて三日坊主が4日になり、4日が5日になり、一貫して物事を継続できるようになるでしょう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

〈読んで感じたこと〉

私は現在7月に資格試験を受けるために勉強をしておりますが予定通り進んでおりません。

まだ全体の三分の一にも到達しておらずもう駄目なのではと半ば諦め状態になっております(笑)。

ただこれを読んでみて3勝1敗はキツイですが(笑)まずは3勝2敗ぐらいから始めたいと思いました。

ダメと諦めずまずはやってみる大切さを実感し、継続して少しでもやることから始め

ます。

最終的には4勝1敗ぐらいまでもっていきたいと思います。

子供のころも宿題は出来ない人間でしたが大人になっても変わらない自分が悲しいです。

もっと成長が必要だと感じる内容の文面でした。

ハモコミ通信 2019年7号

7月号は黒澤創の担当とさせていただきます。

◎ 心をつかむ伝え方(ハモコミ通信 2013年 10月号)

「DJポリス」と称された、警視庁の警察官の話術が話題になりました。

今年6月、サッカー日本代表が、来年ブラジルで開催される、ワールドカップ出場を決めた夜のことでした。

東京・渋谷駅前のスクランブル交差点に、歓喜するサポーターたちが殺到し、騒然となりました。

そこへ登場したのが、警視庁第9機動隊広報係に所属する、20代の男性隊員でした。

車両の上から拡声器を握って、お祭り騒ぎの群衆に呼びかけました。

「サポーターのみなさんは12番目の選手でもあります。ルールとマナーを守ってフェアプレーで今日の喜びを分かち合いましょう」

「怖い顔をしたお巡りさんも心の中ではワールドカップ出場を喜んでいます」

これらの軽妙な言葉を聞いた若者たちから、笑いや喝采の声が上がリ、暴徒化を防ぐことができたのです。

相手を思いやる優しさと、ユーモアに溢れた言葉が、見事に人の心を動かしました。

言い方によって、相手を不快にさせずに言葉を伝えることができるのです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

〈あらためて読んでみての感想〉

当時の時事ネタより、「DJポリス」に関するコラムです。

お茶の間のヒーローとして、一躍人気になりました。

暴力ではなく、話術によって狂騒を見事に鎮める姿は、確かにかっこよかったですね。

一度火のついた相手を、言葉だけで鎮火する、というのは、決して簡単な事ではありません。

思わず手が出てしまって、大惨事に…なんてニュースでよく見かけますね。

相手を不快にさせないよう、さりげなくユーモアを交えながら、自分の思いを真摯に伝える。そんなことができる人間になれるよう、努力し続けます。

ところで、次世代のDJポリスとして2020年東京五輪・パラリンピックに向け、外国語が堪能なDJポリスが育成されていることはご存じでしょうか。

訪日外国人が一挙に押し寄せ、それによるトラブルが予想されますが、せっかくの話術も、言葉が通じなければ意味がありません。

わたしも、外国語の勉強を始めなければ、と思い続けてはや〇年。

自分の思いを伝える前に、まずは日常会話ができるようにならないといけませんね。

ハモコミ通信 2019年8月号

8月号は石川昭恵の担当とさせていただきます。

◎ 曖昧(あいまい)な言葉(ハモコミ通信 2014年12月号より)

社内の後輩育成に悩んでいたTさんは、ある光景を目撃したことで問題打開のヒントを?(つか)みました。

それは、電車内で小学生を引率する先生の姿でした。

Tさんが乗っている電車に、四十人ほどの小学生が乗車してきました。

興奮状態の子供たちは、つり革にぶら下がったり、叫んだり、やりたい放題にはしゃいでいました。

先生が「ちゃんとしなさい」と注意をしても、静かになりません。

ところが、もう一人の先生が何事かを指示し始めると、子供たちは魔法にかかったように静かになったのです。

その先生は、「ちゃんとしろ」といったわかりに

くい言葉ではなく、「口を閉じなさい」「手すりにつかまりなさい」と細かく、丁寧に指示をしていました。

日頃、後輩に対して「きちんと」「ちゃんと」など、曖昧な言葉を使っていたTさん。

翌日から対応を変え、後輩との意志の疎通が改善されたといえます。

「あれ」「これ」などの指示語が多い時は、思いばかりが急いている時です。

依頼や指示は、相手の状況や立場を考えて、具体的な言葉で行いたいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

8月の担当は営業サポートの石川です。

曖昧どころか、「あれ」、「これ」も無い説明が私の場合、増えているような気がしています。

意識して気をつけるようにしないと思いがらもいざ、お願いする段になるとそのことを忘れるということを日々繰り返しています。

この話を読んで、「やさしい日本語」というのを思い出しました。

災害時に日本に滞在している外国の方にどのように情報を伝えたら伝わるか?

例えば、日本人なら「余震に気をつけてください」と言われれば意味がすぐにわかりますが外国の方は「余震???'です。

やさしい日本語に言い換えると「後から来る地震」

他にも「給水=水をもらうこと」「救急車=病気やケガをした人ひとを助たすける車」などなど

その人のお国の言葉で説明できれば一番の助けになるのですが、それが無理な場合は、「やさしい日本語」を駆使して不安になっている外国人の助けになれるように頭の片隅に置いておきたいと思います。

ハモコミ通信 2019年9月号

9月号は鈴木識予の担当とさせていただきます。

◎ 時を待つ(ハモコミ通信 2016年5月号より)

スピード化の時代では、わけもなく先を急いでしまう人も少なくありません。

たとえば、エレベーターに乗り込んで、行き先階のボタンを押すと同時に、無意識のうちに「閉じる」のボタンを押していることもその一つでしょう。

なかには、すぐにドアが閉まらないことに苛(いら)立って、何度も「閉じる」ボタンを押してしまうこともあります。

一般に、エレベーターのドアが自然に閉まるまでの時間は、四秒ほどだそうです。

ノートルダム清心学園理事長の渡辺和子さんは、ある時、この四秒さえ待てない自分に気がついて、深く考えさせられたと、著書の中で述べています。

『四秒すら待てない私』でいいのだろうか。

事の重大さに気付いた私は、その日から、一人で乗っている時は『待つ』決心を立てたのです。この決心は少しずつですが、『他の物事も待てる私』に変えてゆきました」

そして、この待ち時間は、渡辺さんにとって、学生や苦しむ人たちのために祈る時間となったといえます。

待つことの大切さをあかしてくれる話です。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

せっかちで心配性な性格の私。

エレベーターに入った瞬間、まず「閉」ボタンを先に押し、扉が閉まる間に数字を押してます(笑)

急いでるわけではないのに、時間をムダに使うのが嫌な性格なんです。

本当にせっかちでダメですねー。取り越し苦労も数知れず・・・。

「エレベーターが閉まるまで4秒・・・」

今度から自分に「まて！」をしてみます。そうそう、エスカレーターも歩かない！

「時を待つ」ことの大事さは3人の子育てを通して学ばせてもらいました。

親が手を出すことで子供の達成感は薄れ、本当の意味で自信はつきませんでした。

人生の岐路に立った時、悩んだ時、自分から親の元へやってきます。

子供の話にそっと耳を傾け、相談にのり、ベストな選択を探していきます。

話してる間に本人自身が解決策を見つけることもありました。

子供を超えない立ち位置、大事です。

「時を待つ」ことは器を大きく成長させてくれる人生の大事なキーワードだと思っています。

ハモコミ通信 2019年10号

10月号は長谷川育子の担当とさせていただきます。

◎ **喜びが人を変える(ハモコミ通信 2013年6月号より)**

ちょうど100年前に、小説『少女パレアナ』は出版されました。

アメリカの児童文学作家のエレナ・ポーターの作品で、両親を亡くした11歳の少女が、ひねくれた大人や傷心の大人たちを次々に変えていくという物語です。

パレアナは牧師の父親に「どんなことにも、嬉しいところがないものは一つもない」と教えられていました。

そこで、義理で引き取った叔母さんから冷たくあしらわれても、パレアナは喜ぶところを探すようにするのです。

また孤児院の子供や慰問先の病人など、町で出会う人ごとに「なんでも喜ぶ」というゲームを教えていきます。

クライマックスは、事故に遭って両足が使えなくなることを知ったパレアナが、苦しみの中で、かつて元気に歩き回った足があったことを喜ぶ場面です。

会社経営でも、人生でも、その人の心が境遇をつくるのです。

一見ネガティブな境遇でも、喜んでいると良い方向に展開します。

パレアナを支えていたのは、「喜ぶ」という意識でした。

喜びは人を強くするものなのです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

この記事を読んで「少女パレアナ」の全貌を知りたくなり、図書館で借りてきて読んでみま

した。

いろいろな翻訳がありますが、村岡花子さんを選びました。

「赤毛のアン」の翻訳でも有名な方です。

今では少し古風な言い回しが、上品で心地よく感じられました。

この物語は2013年にアメリカで出版され、その当時いたところで話題の中心になったそうです。

パレアナは生まれながらに楽観的な女の子ではなく、お父さんと「なんでも喜ぶゲーム」を楽しみ訓練されて、喜ぶ意識が身につけていきました。

お父さんの考え方や日々語る言葉が思いやりや感謝に溢れていて、娘に良い影響を与えたんだろうなあなどと、フィクションであることを忘れて想像してしまいました（笑）。

パレアナも喜ぶことが難しい状況に遭遇します。そんな時、パレアナから喜び方を教えてもらった町の人たちが、今度はパレアナの助けになっていきます。

それこそ「ハモコミ」。町は素晴らしいコミュニティになっていました！

いつも喜びに目を向けるには努力が必要ですが、その努力は周りも巻き込んで温かい人間関係を育てます。

助け助けられ感謝するなら、喜びはどんどん大きくなる、そんなことをこの物語から学びました。

不平不満が募ってきたら注意信号！

自分の周りに目を向けて、感謝できることを探してみようと思います。

パレアナ・赤毛のアン・アニー…など、物語の少女たちの純粋さや健気さは、少しくすみがちな大人の心を洗濯して爽やかにしてくれます。

パレアナは嬉しさや感謝を言葉にして、跳びはねます！

大人が跳びはねて喜ぶのはちょっと難しいですが、素直に喜ぶこと、心からの感謝を相手に伝えること、努力しようと思いました。

ハモコミ通信 2019年11号

11月号は熊谷美姫の担当とさせていただきました。

◎ 何かいいこと(ハモコミ通信 2014年10月号より)

中堅社員のSさんは「ありがとう」「ありがたい」と、物事を受け止めるように心がけています。

きっかけは、若い頃に世話になった先輩の言葉でした。

入社して三年が経ったころ、仕事のミスが続きました。

プライベートでも友人との関係がギクシャクし、「何かいいことないかなあ」が口癖になっていました。

しかし、状況が好転することではなく、言葉とは裏腹に、良くないことが続きました。

ある時、H先輩から「《何かいいことないかな》と思う時は、当たり前のごことに感謝ができてない時だよ」と言われました。

「毎日ご飯が食べられる、家族が健康で過ごせている、普通に仕事ができる、そうしたことは、実はあたり前じゃないよ。」

そう思えない時は、恩返しのため、コンビニの募金でもしてくれればいいよ」

自分が受け身の姿勢だったと感じたSさん。

先輩の助言を心に留めながら、身の回りの出来事感謝して受け止めることで、状況が好転していったのです。

現状とは、自分の心が生んだ結果でしかないのかもしれない。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

あるコラムで「常にあるものは当たり前ありがたいとは少しも思わず、反対にないものがあれば不幸に思う」ありますね… 恵まれすぎて大切なことが、わかりづらくなってしまっているような気がします。

口癖=現状とは、自分が生んだ結果でしかないとするならば、物事の真理はすごく単純なのかもしれない。

少し目線や口癖を変えただけで、見える景色がかわったり。

些細な事から新しい発見や楽しみが見つけれられるんじゃないかと… そんな毎日を心掛けたいと思います。

ハモコミ通信 2019年12号①

12月号①は佐藤奈緒子の担当とさせていただきますました。

◎ ゴミと挨拶(ハモコミ通信 2015年9月号より)

世界的なアルピニスト(登山家)として知られる野口健氏は、自然環境の保全や登山者のマナー向上にも精力的に取り組んでいます。

その一つが、エベレストや富士山で、置き去りにされたゴミを拾う「清掃登山」です。

野口氏によれば、標高の高い所ではモラルが行き届き、ゴミは見当たらず、登山者同士がすれ違う際はたいてい挨拶を交わすそうです。

ところが、下山して標高が下がると、挨拶が途絶え、ゴミが増える傾向にあるといえます。

こうしたことから「挨拶の途切れ目がゴミの始まり」。

ゴミというのは人や社会の姿をはっきり映し出している」と、著書に綴(つづ)っています。

この話は、割れた窓をそのまま放置しておく、ゴミが捨てられ、その地域の治安が悪化するという「割れ窓理論」にも通じます。

周囲の環境と人の心は、それだけ密接に関連しているといえるでしょう。

私たちの職場においても、整理整頓の徹底から環境を整え、明るく爽やかな挨拶が交わされる環境を、自ら作っていききたいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

WEB店長の佐藤です。

先日ですが、地元の蔵王青麻山に登る機会がありました。

蔵王古道の会という団体が新しく切り拓いた縦走ルートで、どこまで行ってもゴミが一切落ちていなくて感激しながら楽しみました。

山を大切にしている人たちのおかげと思いました。

「挨拶の切れ目がゴミの始まり」と野口さんは著書に書いています。

壱岐産業で地域清掃をしていると何人かの方から声を掛けられることがあります。

続けていたら声をかけてくださる方が増えて

きた印象です。

清掃と挨拶が密接な関係にあると体感しています。

気持ちの良い関係性を続けていくのは大切な事だと学んでいます。

ハモコミ通信 2019年12号②

通常のコラムに加えて、過去の記事の中で、弊社社員のお気に入り再掲しコメントする、という企画です。

最後は私長谷川の担当とさせていただきます。

◎ ひび割れた水瓶(みずがめ)(ハモコミ通信 2012年12月号より)

インドに一人の水汲み男がいました。

天秤の左右の大きな水瓶に水を汲み、丘の上にある主人の館まで運びあげるのが仕事でした。

館に着いたとき、右側の水瓶にはなみなみと水が入っていましたが、左側の水瓶はひび割れていたため水は半分しかありません。

ひび割れた水瓶は「自分はひび割れていて役に立たないから、取り替えてくれ」と男に頼みましたが、男は何も言わずに水を運び続けました。

右側の水瓶はいつも満杯の水をたたえて得意そうにしています。

2年あまり経ったとき、たまりかねたひび割れた水瓶が「自分のような出来損ないを使っていては、あなたの努力が報われない。申し訳ないから、完全な水瓶を使ってほしい」と、また頼みました。

男は黙って、丘の上から振り返りました。

すると、道の右側には美しい花が咲き乱れています。

水汲み男は、「最初から水漏れに気がついていたのだよ。

お前のひび割れを利用して役立てようと考え、私は道の左側に花の種をまいておいたのだ。お前のひび割れのお陰で、雨の降らない土地なのに、こんなに見事な花が咲いた。

ご主人様は毎日新鮮な水と咲き誇る花の美しさを喜び、感激していらっしやるのだ」と言いました。

ひび割れ水瓶はひびがあったからこそ美しい花を咲かせることに貢献できたことに気づいたので、

私たちはそれぞれ自分だけのひび割れを持っているのです。

私たちは皆ひび割れ水瓶なのです。必要でないものは何もありません。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

改めて読んでみて、涙がじわっと湧いてきました。

同時に深く反省をしました。

この話を掲載してから7年の歳月が過ぎ、自分はどれくらい喜びの種まきをしたのだろうか、と。

「ハーモニーのあるコミュニティづくり」を看板に掲げたものの看板倒れになってなかったか、看板をかけたことに満足してはいなかったか。

来年はまさにそれを実行する時だと心しています。